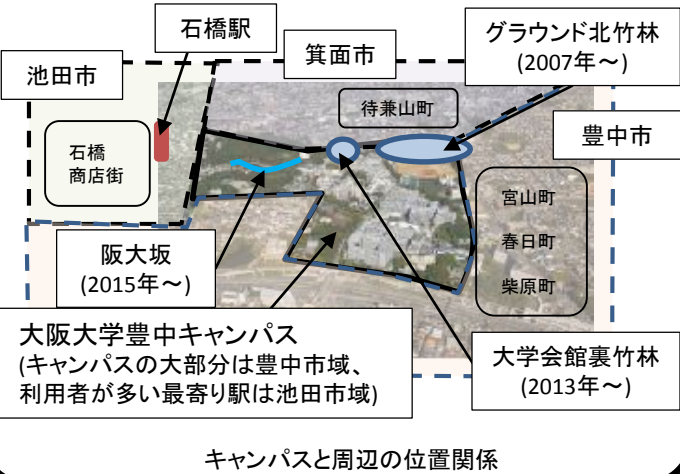


活動の要点

- ・キャンパス緑地のデザインであると同時に、大学内や周辺地域との関係性や継続のための「仕組みのデザイン」となっている。
- ・結果として、大学キャンパスを活用しつつ、大学としての特性を活かして関わる事で、周辺地域間の枠を超えた多様な連携や新たな活動を生む可能性を広げている。
- ・大学の教育研究のフィールドとしてキャンパスを活用でき、毎年入れ替わる学生を含めた好循環を生み出している。



(地域と大学の関係)

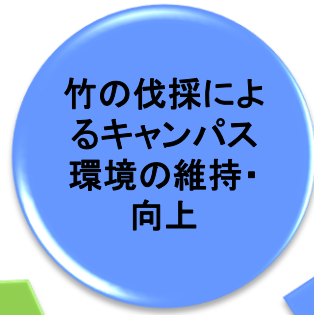
- ・きっかけとなる活動が2007年に開始してから11年、キャンパス北東にあるグラウンド周辺や大学会館裏の竹やぶの維持管理活動を展開してきた。
 - ・毎年5回の定例活動(4月:タケノコ掘り、6月・11月:清掃・間伐、12月3月清掃・間伐・施肥)で、毎回30人ほどで竹の間伐の実施や清掃などを実施している。
 - ・キャンパス東側の豊中市域の3つの自治会、加えてキャンパス北側の箕面市域の自治会と共に活動している。
 - ・大学からは施設部やキャンパスデザイン部門、および学内告知で興味を持った教職員や学生が参加する。
- (学生と教育研究)
- ・1年生向けの共通教育の講義で授業として、学生(20名ほど)が参加する。
 - ・流しそうめんを企画する経済学研究科のゼミから、竹の伐採方法の習得などを目的に学生が参加している。

●成果

- ・グラウンド周辺の竹林は整備が進み、継続的な整備の継続と共に、竹林の活用に向けた次のステップに入っている。
- ・大学会館裏の竹やぶも、やぶの中に分け入れるまで整備が進んできた。
- ・単なる緑地整備にとどまらず、講義やゼミ活動の一環として取り入れた活動に発展した。



環境維持のため親竹を保護(親竹に育成中)と表記



整備が進んでいる大学会館裏の竹やぶ



グラウンド周辺竹林の活動前(上)と現状(下)



好循環

参加者の環境への関心の高まり、継続性・発展性

伐採した竹を使って、地域と大学を繋ぐイベントを実施

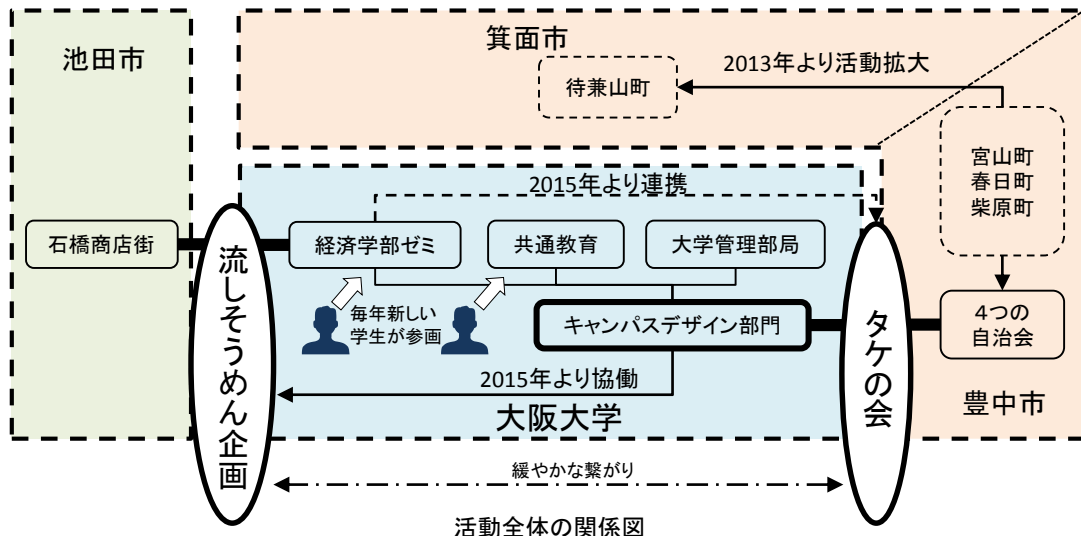
- ・これらの環境保全とイベントは持続しないと大きな効果を発揮しないが、持続のためには活動の蓄積と共に、マンネリ化しないための新陳代謝も同時に必要となる。
- ・この点において、一定期間で学生が入れ替わり続ける大学だからこそその役割を果たせると考えられる。

●成果

- ・自治会や商店街という地域に根差した組織と、毎年新しい学生が入ってくる講義やゼミの学生を持つ大学とがうまく連携した活動となっている。
- ・市域や組織を超えた緩やかな繋がりを築ききっかけを生み出している。
- ・学生の身近な緑地環境に対する意識の向上に繋がっている。
- ・キャンパスの緑地資源を広く周辺地域や学内教職員に知ってもらう機会が増えた。

●成果

- ・1年を通じて複数回、竹林を活用する事が出来るようになってきた。
- ・ゼミ活動との連携など、教育研究にも直結した活動へと発展してきている。
- ・活動を通じて新聞への掲載などもあって地域や学内でも認知度が上がり、より多くの参加者が見込まれるようになった。



4月のタケノコ掘り。地域の人々による専用の道具やタケの生育・採取に関するノウハウの伝達の場にもなっている。



学生がデザインしたフライヤー



7月の流しそうめん企画。経済学部ゼミ学生(仕掛学)が主体となって運営。